Literacy 62

単語化されるまでに紡がれる物語

「まちづくりやってます。」
「なんですか、まちづくりって?」
「えっと、例えば・・・・」
自己紹介の時によくあるやりとり。
最近は、どんなことをやっているかではなく、どんな思いをもってやっているかを先に話すことがある。
まちづくりにかかわる中で、個人的に大切にしたいと思っていること。

Alternative ｜ オルタナティブ

既存の制度や方法に代わる新たな取り組みをつくっていくこと

Democratic ｜ デモクラティック

真の民意を反映していくこと

Personal ｜ パーソナル

社会や地域を変えることの前に自分が変わること

→パーソナルについて

僕自身の性格上、何事をやるにもやっぱり自分が一番であるという点。子どものためといっても、それは自分が幸せになりたいからということが少なからずある。一方で、世界の子どものために日々活動している人たち、本当にすごいなと感心させられるばかり。自分にはとうていできそうにない。でも、「自分の幸せのため、目の前の人の幸せのためにやっていること」＝「社会にとって良いこと」であれば、さらにそうした活動が共感を呼べば、立派な社会貢献じゃないかなあと。

こうした個人の思いや活動が、始まりは私益的・共益的であったとしても、人との出会いや何かしらのきっかけにより、課題解決の糸口になる。

最近の若者の関心ごとや活動には、こうした性質のものが多く、それらをちゃんと世へ公益的に導いていくのもＮＰＯの役割だと思う。

そしてもう一つ、今回の東北大震災での支援活動を通じてわかったことがある。

僕は、震災後、陸前高田や大船渡市のある気仙地区（岩手県）へ支援に入った。そこには、これまで市民活動をやっていた人や地域のキーマンが集まって、復旧・復興に向けた活動をしようという動きがあった。

自分はそこの連携組織のコーディネートを担い、会議の進行や方向性の取りまとめ、活動の見える化などをお手伝いした。

普段は、岡崎という地で、まちづくりを担うＮＰＯという看板を背負い、ファシリテーションやらボランティアコーディネーション、ワークショップなど少しカッコいい横文字で組み立てられたテクニックによって、市民参加型のまちづくりを進めている。だから、こうしたテクニックを有する専門家という立場で呼ばれ、その能力を十二分に発揮することが任務だと思って、気張っていた。

ただ、あの場に必要だったのは、そんなことではなかったと、振り返って思う。

どれだけ被災した人たちの気持ちを汲み取れるかという「センス」、感覚的なもの。わずか数分という接点の中で、相手の表情やしぐさなどすべての情報を隅々までくみ取って、相手が何を伝えようとしているかを判断する感性のようなもの。一人の人間としての在り方「人間性」そのものが問われていた。

専門家という肩書きだとか、テクニックではなく、僕がなぜその地にいて、これからどう関わりたいか。

（Y）

これが授業であれば、確実にテストにでるだろう。でも、この言葉自体はあまり重要ではないので、覚えておく必要はない。重要なのは、単語化されるまでに紡がれる物語。そこにたどり着くまでにあった紆余曲折や、そこで生まれた感情など、そうした一つ一つの事象がつながり合ってできあがる物語こそ、価値あるもの。

まちのミカタ
Literacy
2013.3 vol.62

発行・編集
特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0072 岡崎市六供町字杉本78-1
TEL (0564)23-2888／FAX (0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com／http://www.facebook.com/okazaki.lita

配布
岡崎市図書館交流プラザ･Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
Ragslow／亜cha:la／森の花畑／FMおかざき／松應寺／杉くんの駄菓子屋／FURAgallery／angelshare／長誉館／cafeくらがり／コミュニティ・ユース・バンクmomo／三河サドベリースクール シードーム

［生活芸述］

最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、その結果に至るまでのプロセスの中で生まれた
個人の価値観への気づきや意味を、一つの物語としてステイトメント（表現）する。

まちづくりは「生活芸述」の視点から始まる。

01　事実は１つだけではない

東日本大震災並びに原発事故の影響により、今もなお約1200人の方々が愛知県で避難生活を送っている。そして、これまでに３名の方がこの地で亡くなっている。

これらは関連死ではないのだろうか。

関連死として認定されるまでには、非常に複雑なやり取りが発生する。遺族は、悲しみも消えぬうちに手続きなどをしなければならない。だから、遺族の大半はそうしたことをしない。
この現実を、国や自治体の人たちは知らないし、知る術もない。認定された事例が集まらなければなければ、制度化もされず家族内の問題として、社会に認知されず、時間と共に忘れ去られていく。

認定されていないだけで、原発事故がなければまだあったかもしれない命。その数は、世に知られず、これからも細々と増え続けると思う。

人災とも言える原発事故がこうした事態を招いていることがわかっていても、原発はなくならない。
「自分が動いてもどうすることもできないし」「もっと偉い人がんばれよ」などいろいろ言い訳をしてしまう。
でも、知ることはやめない。いろんな意見を受け止めることも続ける。手の届く範囲でできることをやる。

地位とか名誉とか付き合いとか、便利な暮らしももちろん大事だけど、命より大切なものなんてない。

20年後、今の子どもたちが大人になったとき、今僕らがやっていることをどう評価するだろうか？

関連死も原発事故のことでも、教科書には載らないことがたくさんある。
その中には、僕たちが本来大切にしなければいかない事実が埋もれてしまっている。

まちづくりをやっていると、そうした温かい活動や濃い活動、反政治的に見える活動などと出会うことが多い。
こうした活動や知見をちゃんと子どもたちに伝え遺していきたい。
正しいかどうかは、僕が判断するんじゃない。これからの未来を担う子どもたちだ。
多様な価値観が入り交って、全員満場一致が難しくなった現代に、自分にできること。

「たくさんの選択肢をつくっていくこと」

今、社会で起こっていること、僕らがやっていることがやがて歴史になる。
小さいことも大きいことも関係なく、子どもたちに受け継いでもらいたい。
おかしいものはおかしい。そう思ったら別の答えをつくっていくしかない。
将来、自分たちがちゃんと責任をとれるように。

（Y）

02　学生→社会人

大学を卒業し、りたに入って4月で1年になる。

若者を応援したい！地域のため人のために活動している人の役に立ちたい！という想いが捨てきれず就活に身が入らないでいたところを、ちょうど今くらいの時期に拾ってもらえた。

学生のころは岡崎では知る人ぞ知る学生団体DASH　MANの運営をしていたため、自分はなんでもできると思っていた。

しかし、いざ働き始めると自分よりも一回り、二回り年上の方々に囲まれ自分の知識、考えの浅さに気がついた。自分の心の中で思った、それ以上の発想がほかの人から瞬時に出てくるため、いつの間にか（いや、実は最初からか？）まさに物言わぬイエスマンになっていたと思う。「大人ってすごいな、まだ学生から抜け切れていなくて情けない」とこっそり悩み続けた1年だった。

ついこの間のことだが、僕のところに高校時代の友人が訪ねてきた。若者の就労支援をする団体を立ち上げたいという相談だった。ヒアリングを通してその熱い想いにふれ、若者を応援したいという想いをいつの間にか置き去りにしていたことに気がついた。りたで僕のすべきことがやっと見つけられた気がした。

来年度こそは学生や同世代の若者の活動を支えていきたい。僕が学生だったときに周りの大人が支えてくれたように、今度は僕が支える番だ。

（H）

03　違って見える

最近購入した足踏みミシンがとても気に入っている。

ずっと探していたのに、結局見つけたところは 近所の商店街。
そこの主人は腕利きで、おかげで還暦過ぎの我が家のミシンもキビキビ動いてくれている。
商店街の底力を私も肌で感じた。

少々部屋は狭くなったけど、次は何を作ろうか、毎日ワクワクしている。

同じ服やかばんも、「どうやって作るのだろう」という目で見れば、違ったものに見えてくる。

（F）

Text：Takahiro (Y)amada／Sayoko (F)ukaya／Ryoto (H)iraiwa